

電子書籍



本や雑誌をパソコンやスマートフォン、専用機器などの画面上で読める「電子書籍」に注目が集まっている。スペースをとらず、持ち運びもしやすい。文字の拡大など、紙の書籍にはない便利な機能も付いている。ただ、購読には個人情報登録やクレジットカードでの支払いが必要など注意すべき点もある。

ネットで購入、本棚不要



デジタル

電子書籍は、本や雑誌に書

かれた文章や絵などの情報を電子化し、画面上で読めるようにしたもの。電子化はコミックや新刊小説などを中心に進んでいる。紙の本と同時に売される電子書籍も増えている。調査会社「インプレスR&D」（東京）の推計では、2011年度の電子書籍の国内配信市場は629億円で、16年度には3倍強の2000億円に達する見込みという。

電子書籍を読むには、パソコン、スマートフォン、タブレット端末や、電子書籍専用の機器が必要だ。インターネット

に接続して電子書籍を扱うサイトからダウンロードして購入する。値段は、紙の書籍と同額か少し安いものが多い。機器の記憶媒体の容量によつては1台で何百冊も書籍を保存できる。本棚など置く場所が不要になり、携帯機器なら持ち運びも簡単だ。

専用機器は、家電量販店や大型書店などで8000円ほどの値段から販売されている。画面が白黒の場合が多いが、見え方が紙に印刷された文字に近く、目が疲れにくいという。スマートフォンなどに比べ、電池の持ち時間が圧倒的に長いのも特徴だ。

「実際に購読する前にまずは『立ち読み』してみてください」と話すのは、大日本印刷（東京）電子出版ソリューション本部の福沢琢磨さん。同社はNTTドコモと共同で会社を設立し、2年前から電子書籍販売サイト「honto（ホント）」を運営する。

「立ち読み」は、目次や物語の冒頭など一部を読むことができる機能。電子書籍を扱う多くのサイトで立ち読みができる。「電子書籍は一度ダウンロードすると返品ができない。事前に内容を確認してください」と福沢さん。

国立情報学研究所（東京）は昨年9月、東京・神保町に「e読書ラボ」と名付けた電子書籍の体験コーナーを作った。17種類の機器が置かれ、無料で触れることができる。小さな文字を拡大して見やすくしたり、文章を読み上げたりする機能が体験できる。



電子書籍が読めるさまざまな機器が並ぶ体験コーナー（東京・神保町の「e読書ラボ」で）

同研究所特任准教授の阿辺川武さんは、「画面の見え方などは実際に目にはないと、理解しにくい。まずは手に取って検討することが大事です」と話す。また、「機器を用意するだけでは電子書籍は購入できない。名前や住所、メールアドレスなどの登録や、クレジットカードでの支払いが必要なが多い」と話す。

電子書籍を利用する時の注意点

- ・インターネットがつながる環境で機器にダウンロード（購入）してから読む
- ・電子書籍を扱うサイトは複数あるが、専用機器の場合は、決められたサイトでしか購入できないことも
- ・支払いは、クレジットカードで行う場合がほとんど。カードの情報や連絡先など個人情報の登録が必要になる
- ・一度購入した電子書籍を別の機器で読める場合もある。電子書籍を扱うサイトによって条件が異なる
- ・一度購入すると返品はできない（阿辺川さん、福沢さんの話をもとに作成）

電子書籍には無料の本もある。著作権が切れた文学作品を読めるサイト「青空文庫」では、夏目漱石や芥川龍之介らの作品を無料でダウンロードして読むことができる。初心者はこちらのサイトから利用するのもいいかもしれない。